

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

エリア・コンサルティング



昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダク

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。大分県選出の匠、日田下駄職人・本野雅幸さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



1月18日、プレゼンテーションにて

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけたくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、グエンエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

トを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値

博多織やレザー 鼻緒にこだわり

水郷・日田は良質な杉の産地として知られる。日田下駄はその豊富な材を使い、江戸時代末期から生産が始まったといわれている。本野さんは下駄を加工販売する「本野はきもの工業」の3代目。今回のプロジェクトでは、日田で製造されていない二枚歯の柁下駄に目を付け、オリジナルの「二の字デラックス」を仕上げた。



日田杉の山林

日田下駄は分業制の量産型。木地職人が下駄の形状に加工するため変化がつけにくい、「安いイメージが定着しつつある日田下駄を、方向性は変えずにブランド力を上げたい」という思いが後押しした。材料の調達から手掛け、形をデザイン。削り出しは地元のクラフト作家に依頼した。鼻緒にもこだわった。採用したのは、博多織、小倉織、大島紬、鹿児島産黒豚の革など、「オール九州」の上質な素材。木工の町である日田で、家具に使われているレザーも分けしてもらった。「無難な和柄」が



木地の角を削る「面取り」作業



モダンな印象の二の字デラックス(レザー)

多い日田下駄にはあまり使われていない生地で、高級感を演出した。



完成プロダクト「二の字デラックス(博多織)」

本野雅幸 大分県/日田下駄職人

全国の匠との出会いも収穫

下駄作りに携わり、約10年。オソンドックスな日田下駄をメインに製造しながら、アーティストやネイリストなどの共同制作にも取り組んできた。台に布を張ったものや、ヒールの高い「ミュール下駄」など、時代に合わせた商品アイデアを考案。一方、「大切なのは履く人の気持ちになって作る」ところという姿勢は変わらない。



天日干しで木地を乾燥させる

プロジェクト参加に当たり壁となったのは、日田下駄の生産が分業制であること。製材する枕職人、下駄の形状に加工する木地職人を経て、アソケの本野さんらが塗装や鼻緒仕上げといった工程を担い、販売する。そのため独自の形を作ることが難しい。履き心地を損なう恐れがあり、確立された台の形を変えるのは困難という課題もあった。「実はエリア・コンサルティングまで、本当に何をどうしたらいいかわからなかったんです」と苦笑する。

エリア・コンサルティング



本野 雅幸
大分県/日田下駄職人

2007年4月より「本野はきもの工業」で日田下駄の生産をはじめ。日本人の暮らしから下駄が姿を消していく中、現代の人たちにも親しみを持ってもらえるデザインを工夫。父と互いに刺激し合いながら下駄作りに没頭している。新宿伊勢丹の婦人靴売り場や、新宿高島屋の呉服売り場、またイタリアミラノでイベントを開催。フランス ジャパンエキスポに2015年7月出展。



本野さんの仕事道具



下駄が似合う日田市豆田の町並み

近年は安価な輸入品や化学素材のサンダルの普及に押されるが、「日田下駄をもう一度『メッジャー』にし、『日田イコール日田下駄』と誰もが知っているような存在にしたい」と願う。商品を通じ、日田杉そのものの良さを広めたいという思いもある。東京五輪の開会式で、日本選手団に日田下駄を履いてもらうという夢もある。

継承という縦糸に、挑戦の横糸を通しながら、続いていくモノづくり。日田下駄はまだ、大きな可能性を秘めている。